

\*\*\*\*\*  
 第四部 乙女の泉の小さな諍い  
 \*\*\*\*\*

結局、フウルウは鶴に付き合う羽目になった。ただし、まったく不本意というわけでもない。フウルウが自身の好奇心に負けたという一面もある。

何せ、あのアルイクシル・ディアウスだ。本来普通名詞であった《アル・アリアム・アラト・アブヤド白衣の賢者》をほとんど固有名詞にしてしまった男だ。大いに食指をそそられる人物である。

そのアルイクシルに会えるとなれば、鶴から離れられないという事情がなくとも、是非とも、出向きたいというのがフウルウの本音だ。勿論、偽者の可能性は十二分にある。

しかし、鶴の存在を考えれば、仮に偽者であっても、得るものは少なくない。本当は女媧娘娘の方へ出向いた方が確実なのだろうが、もう他界している事、鶴の都合、何より往復に最低一年というのが辛い。その点、アルイクシルの方はフウルウ自身に帝都ムンダペレへの定期的な用事があるので、ついでに立ち寄ることができる。ちよつと、時期が外れるが、そのくらいの都合はつく。完全なハズレだし——つまり、その場に誰もいなく——ても、軽い遊覧旅行だと割り切ることもできる。農閑期の長期休暇申請はいささか村人の視線が痛かったが、代行をきちんと用意しておいたので、最終的には、フウルウのわがままが通ることになった。体の方も順調で、『傀儡の力』が結構便利であることもあって、なんだかんだと愚痴をこぼしながらも、出立前日にはフウルウは笑顔で荷造りをしていた。

ちなみにフウルウ休暇中の教師代行はディーナザードだったりする。実のところ、ディーナザードの教師代行は今までも何度かあった。数学好きの彼女はその分野、及び物理などでは、既に師であるフウルウを凌駕している。おまけに人当たりは——諸々の言動を冗談と割り切れば——完全にディーナザードの方が上だ。数学のみの短期集中授業をやらすには、うってつけというわけだ。もつとも、ここまでうってつけだと、村人たちの『いやはや、もしもピヤオ殿がこの村を去られても、ヌーフのお嬢さんが居れば、うちの学校は安泰ですな。わはははは』という正論談笑が皮肉に聞こえて、フウルウとしてはなかなか複雑なのだ……。

とはいえ、そのディーナザードも当初、『鶴ちゃんの操はあたしが守るっ！』と、奇妙な方向性で意気込み、自分も付いていくと主張した。貞操観念という意味においては余計に危険になりそうではあったものの、安全保障という意味ではそちらの方がいいかなと、フウルウは考えないこともなかった。しかし、その場合、シャービス亭は休業せねばならず、私塾は休校せねばならない。

そもそも、例の《サラーフ・アルムイード再生への導き手》の襲来が尾を引いている。

あの事件は、今のところ、ミナレットの村中では『なかった』ことにされている。フウルウの判断で事件を隠匿することにし、ディーナザードがそれに同意し、口先八寸でうまく誤魔化したのだ（勿論、ディーナザードには『本当に嫌な大人になりましたねー』と皮肉を言われたが）。

はつきり言って、連中が本当に《サラーフ・アルムイード再生への導き手》であれば、ミナレット村では有効な対策などない。戦闘訓練を積んだ一流の巫術師を中心に構成された武闘派集団相手に、自警団の若者連中や警察官の爺様だけで、どう太刀打ちしろというのだ？ たしかに巫術師である鶴とその傀儡（つまり、フウルウ自身）を中心に、村人が一致団結し、軍事単位を

形成し、有機的にそれを連携させ、村の地理的、数的優位を活かせる集団戦に持ち込めば、戦術的には撃退できる——と、フウルウの頭脳は判断している。だが、政治的に不可能なのだ、自身の故郷での経験が嘲笑している。

当然の話だ。あの村の戦力で《再生への導き手》を撃退するためには、村人から死体が出ることを覚悟せねばならない。それなら、村人は《再生への導き手》襲来の原因である鶴とフウルウを村から追い出すだろう。

村人たちはフウルウを慕ってくれている。だが、さすがに人命と秤にかければ、後者を選ぶ。ならば、こちらから、出て行った方が余計な摩擦が少なくて済む。そして、どうせ出て行くなら、フウルウたちの遠出を『ちよつと、久々に帝都に行ってみることにしました』と宣言した方が賢明だ。その方が事態解決の暁に、フウルウもあの村に戻り易くなる。実際、《乙女の泉》に着いた後は帝都ムンダペレに寄って来る予定なのだから、嘘でもない。書籍の購入やら、論文の提出やら、ウルルの公開講義やらで、フウルウがムンダペレに向うのは今までも何度かあったことなので怪しまれることもない（ディーナザードと同じくフウルウが見慣れぬ少女を連れましていることには不審の目が漂っていたが）。そして、その自然さをより際立たせぬためにも、ディーナザードはこの村に残る必要があった。

一応、村に一人だけ残していくと、かえって《再生への導き手》の標的にされはしないかと、フウルウは危惧もした。しかし、ディーナザード曰く『あ、それは大丈夫よ』とのこと、ケラケラと笑っていた。その自信がどこから出てくるのか、フウルウとしてはさっぱりだったものの、行動を共にした方が、むしろ、より《再生への導き手》に狙われる危険が増すかもしれない。それを考えると、あまり深く追求できなかつた。なお、『実はディーナザードも《再生への導き手》の一味なのでは……』と、フウルウが口に出すと、容赦なく殴られたことも、付け加えておこう。

さらに、ディーナザードが自分に帝国軍部との連絡を取り付けられる《再生への導き手》に示したことも、彼女のミナレット村残留の方針を強化した。先程の《再生への導き手》に對抗する術はないというの『ミナレットという小さな村単独では』という条件付きの話だ。アツザフル帝国の公安機構の力を借りれば、《再生への導き手》から、身を守ることは難しくない。いや、《再生への導き手》を打ち破ることもできる。帝国としても《再生への導き手》は不倶戴天の宿敵である。フウルウたちとは利害が一致する。対《再生への導き手》戦で、彼らの助力を願うのは容易い。というか、完全に彼らに任せてしまえるだろう（ただし、その場合、《再生への導き手》を退けた後、帝国が鶴とフウルウをどう扱うかが問題になるが）。

厄介なのは、どうやって、《再生への導き手》の襲来をアツザフル帝国の中央に知らせるか、だ。

フウルウと鶴の《乙女の泉》到着後の帝都ムンダペレ行きは、そのためのものでもある。帝都ムンダペレはこの帝国の治安のすべてを統括する中枢機構でもある。そこに駆け込めば、最も手っ取り早い《再生への導き手》対策となるだろう。

しかし、それにしじつじつした時の保険があるにこしたことはない。ディーナザードに軍部との連絡のあてがあるのなら、それを使わない手はない。彼らに守ってもらおうというもの、有効な《再生への導き手》対策だ。ただし、それにはディーナザード自身がミナレットの村に残っている必要があるのだという。となれば、彼女にはやはりミナレット村に残留し

てもらわねばならない。

ディーナザードはちよつとばかりごねたが、これ以上、無関係な人間を巻き込むことを好まなかった。鶴の要望も汲み取って、結局は諦めた。

かくして、フウルウと鶴の二人は旅立った。幼い子供と二人旅というのは自分にとってあまり心地よいものにはならないだろう——そういう危惧がフウルウになかったわけではない。

しかし、意外な程、この少女との馴れ合いは楽しかった。女媧娘々とアルイクシルのことを除けば、彼女はフウルウ好みの理知的な少女だった。勿論、時たま、世間ずれしている一面やフウルウの嫌いな『子供らしさ』を見せることもあったが、フウルウが注意すれば、すぐに改める素直さを持っていた。ディーナザードにはぜひ見習って欲しい。

鶴の方もフウルウを信頼と尊敬に足る大人として見てくれている——と、思う。ただ、どうしてもフウルウはその辺りの機微に疎い。だから、それが本心からのものなのかと問われれば、自信はない。まして、二人の間にはどうしても傀儡と傀儡使いにして、保護者と被保護者にして、恩人と被恩人という関係が入り込む。鶴が見せる笑顔は本物かと尋ねられたら、なおのことだ。もつとも、それらは気にしていたらきりが無い。だから、フウルウは気にしないことにした。そして、

「ちなみに流浪の四仙《勇者》チーシュイについては？」

「いい男だった……と。ただ、私と釣り合うほどではなかったけどね……とも」

「……もうちよつと、別の観点からの意見はなかった？」

「申し訳ありません。お師匠様はあまり昔のことを語られなかったのです。わたしも特に聞き出そうとは思いませんでしたし……」

「そうか。……では《根の国》の律令制度だが……」

というように、状況確認という意味もあるが、ほとんど好奇心の赴くままの会話を続けていた。フウルウが口を開けばどうしても話題が歴史学、文学、法学、哲学から、現在のアツザフルや中東や——彼はあまり話したくなかったが——《夏の国》へ話題に流れることが多い。さすがに探究士の弟子だけあってか、それらの話題やそれに伴う論議などは鶴にとっても愉しそうだった。

勿論、他に共通の話題がないのも事実だった。フウルウにはディーナザードのように子供と無邪気にじゃれあうといった器用な真似ができない。そんな悲しい現実を何度も実感させられたことも多い。だが、基本的に大人びている鶴はそれほどその辺りにこだわることもない。加えて、フウルウ自身信じられないことに、また、絶対量自体少なかったが『他愛のない世間話』を鶴と交わすことさえできた。

フウルウが足を動かしながらも、こんな時間が続けばいいと思いはじめた頃……、

「あ……」

鶴は立ち止まった。

目の前に巨大な集落が現れたのだ。

おそらく彼の地の名の由来であろう湖を中心に、森林、住宅、商店、農地が入り乱れながらも円状に広がっている。

鶴はすぐに大気屈折性望遠用巫術《千里眼》にて、確認した。

「間違いありません」

——もう、着いてしまったか……御伽噺おとぎばなしなら、一つくらい障害があるのが定石なのに。フウルウはそんなことを考えてしまった。正直、鶴の目的がアルルイクシルの殺害である以上、この地に着かないほうがいいと思っていたところがある。

「あれが『乙女の泉』アイン・アルルイクシル」

フウルウの主たる黒衣の少女は明らかに歪んだ笑みをこぼしていた。

「やつと、やつと、あの男を殺せますよ」

\*\*\*

当然ながら、『乙女の泉』については下調べをしてある。要は帝都ムンダペレを支える第一次産業を中心としたありきたりな農村の一つだった。

しかし、その農村に入って、開口一番、鶴は感嘆の声を漏らした。フウルウも一瞬、暗澹たる気分が四散し、喫驚が心理を支配していた。

「豊かで大きな街だったのですね」きよろきよると、鶴は左右の石畳の家屋を眺めながら、「正直、もっと小さな村を想像していました」

「……あ、ああ」フウルウは返答するのにはしばらく手間取った。

違う。豊かで大きな街だったのではない。豊かで大きな街になったのだ。

フウルウの調べた限りでは、鶴の思い込んでいたような小さな農村だった。経済も治安も生活水準もそれほど酷いものではないにせよ、飛びぬけて素晴らしい村というわけではなかったはずだ。

しかし、今、眼前の道路には整然と露店と商店が並び、巨大な市場を形成し、そこには食料、衣類は勿論、書物や装飾品、果ては精霊結晶までがずらりと売り出されている。住宅地の窓や扉は解き放たれているものも少なくなく、その中には例外なく家具調度が並べられているが、盗む者どころか見向きする者もない。鶴と同じ年のころの少年が学校帰りといった様子で水飴を買い食いしている。水の流れる音を刻む灌漑が血管の如く伸び広がって、商業地と住宅地の外側にはこの街従来の緑の農業地が地平線の彼方まで同心円状に埋め尽くしている。それでいながら、余程、砂漠化に留意しているのだろう。どこの田畑の土にも決して無理な負担はかかっておらず、常に一定の水気と地味が確保されていた。

資料にあった『乙女の泉』の如き平凡な農村はどこにもない。おそらく、フウルウが参考にした資料が古かったのだろう。

だが、古いといってもたかだが五年程度だ。この五年間に何があったか？  
「……いや、そういえば、皇帝が変わったな」

四年前に当時若干十二歳の少年皇帝シャハリヤールが即位したのだ。当初はその年齢と登極にまつわるキナ臭さが話題となったが、すぐに別の話題がそれを取って代わった。四十年前の帝国官僚で、当時の皇帝の治世を痛烈に非難し過ぎた故に、帝国を追放されていたアブルールファイダー六十二歳に、皇帝が自らわざわざ足を運び、丞相フジールとして迎え、長老シャイフと敬い、彼に巨大な権限を与え、一大改革を敢行させたのだ。そして、彼の行った試験特区の一つに確か『乙女の泉』があった。

——と……すると、これが『長老』アブルールファイダーの力か……！

故郷の老人どもが昔はこうだった昔はこうだったと口煩く言いながら、とうとう一度も

見せることはなかった堯風舜雨とはこういうものか……？ いや、違う。仁徳のみで社会が成り立つはずがない。

これは政治だ。いや、これが政治なのだ。不断の努力、不屈の意志こそが、この地の潜在的な富を引き出したのだ。

——しかし……たった一人の政治家の力でここまで明確な成果を上げるとは……。ただでさえアツザフルのような老大国では改革結果など見え難いというのに……。

「……<sup>よわい</sup>齡七十を過ぎてなお、志、未だ衰えず……か」

「ふ、フウルウさん、わ、わたし、涙腺機能の調整をしくじりました？」

「え？」

鶴の言葉で、フウルウは初めて自分が泣いていることに気付いた。

「い、いや、単に、情けなくて、悔しくてね」

涙を拭きながら、フウルウには己の涙の理由を答えた。

フウルウは本当に情けなく、悔しかった。アブルルファイダーと自分の境遇にそれほど違いがあるとは思えない。政争には勝ったが、党争に負けてしまった。力があつたが、周りに認められなかった。正しいことをしようとして、人に受け入れられなかった。しかし、それからが違う。フウルウはあっさりすべてを投げ出した。アブルルファイダーは追い出されるまで粘っていた。そして、今、フウルウは、しようとしたこと、認めさせる力の形が変わっただけで、本質は変わるはずがないと考えながらも、ひよつとしたら無為を重ねているのではとの疑いを捨てきれずにいる。正直、十年後、自分が為すべきことを見失っていないという確信はない。しかし、アブルルファイダーは為すべきことを見失なわなかった。四十年、四十年である。フウルウの全生涯を上回る時間をアブルルファイダーは耐えに耐え、そして、今、己の理想の第一歩を踏み出したのだ。

「すまないね。大の大人がいきなり泣き出したりなんかして……」

フウルウは謝った。鶴にしてみれば、いきなり泣き出したフウルウは理解不能だろう。実際、明らかに鶴は考え込んでいる。そして……、

「ああ、なるほど、極悪非道のアルイクシルが聖人君主のお師匠様を殺しておきながら、こんないい街でのうのと暮らしているのが悔しくて、それを今の今まで放っておいたのが、情けないんですね」

……実に大胆な解釈をした鶴は感極まった様子で、フウルウの手を握り締めた。

「わかります。わかりますよ。その気持ち。しかし、もう、慟哭に沈む日々は終わりです。さあ、共に、アルイクシルをぶち殺してやりましょう！」

「い、いや、それは、その……」

「しかし、ここまで街が大きいと、いかに番地がわかっているとはいえ、たどり着くのは大変かもしれないですね」

「……なら、とりあえず一泊して……」

「あ、そうだ。これほどの街ならば。役所できつと案内してもらえますよ。フウルウさん」

「……」

フウルウは鶴の聡明さと《長老》<sup>シャイ</sup>アブルルファイダーの行政手腕を心底恨んだ。

「ほら、ちょうど、あそこに、役所があります」

ああ、なんて旅人に親切な街なんだ。検問はほとんどないくせに、こういう細かい気配

りは、ちゃんと行き届いている。

「すみませーん。第十三地区八番地って、どの辺りになるのでしょ……」

フウルウが鬱々としてしていると、役所に駆け寄って行った鶴の明るい声が突然途絶えた。

「……………」

「……どうしたんだ？」

「……夔っ！」

いきなり鶴は半言語巫術で異形の《夔》を闇色の大鎌の形に整える。

尋常ならざる光景にざわめき始める周囲の人々と同じく、フウルウも突然の鶴の行動に困惑した。

そして、少女の視線の先に役所があり、そこに警官たちの集団がなにやら話し込んでいることに気付いた。

「フウルウさん、戦闘体制を」

「へ？」

「《アル||イクシルの手下》ですっ！」

「は？」

「早くっ！」

訳はわからなかったが、鶴の切羽詰った様子に、あわてて、フウルウは丸暗記させられた祝詞を唱え始める。

が、すぐに後悔した。よく考えれば、向こうの《アル||イクシルの手先》がこちらに気付いていない可能性も十分にあったわけだ。わざわざ、向こうの注意を引かずに通り過ぎればよかったのだ（もっとも鶴が《夔》を出した時点で、手遅れだったかもしれない）。

「あ、あの少女だっ！ みんな頼む！」

「二は、はいっ！」

警官姿の《アル||イクシルの手先》の男が鶴を指差して叫ぶと、その場にいた数多の警官たちが一斉に動き始めた。よく訓練された動きで、あつという間にフウルウたちを取り囲んだ。

——ちよ、ちよっと、待て！

もし、祝詞を紡いでいなければ、フウルウはその思いを口に出したに違いない。

——……どういうことだ？

あの《アル||イクシルの手先》の男が警官の格好をしていて、なおかつ、彼の一言で警官たちが動いた。普通に考えれば、《アル||イクシルの手先》の男がそれなりの地位にある警官で、この街の警官たちは彼の指示に従ったということだ。

——だが、それならば、話し合いで解決できるかもしれないな。私も情報不足だ。

甘い考えかもしれない。だが、温室で理想を論述する学者は温室の理想を实践せねばならない。そう考えて、フウルウが詠唱を中断しようとした……その時、

『《夔一足》！』

視認などできるはずのない速度で闇色の何かが鶴の差し出した右手から飛び出す。いつの間に詠唱していたのか、鶴が言霊と共に言語巫術を発動させたのだ。

その闇色の濁流に襲われた一人の警官は、間一髪ではあるが……

「おや、うまく避けたものですね」鶴はクスクスと品よく微笑んでいた。「まあ、早いか遅

いかですけれどね。さて、誰から死にます？」

——…この大馬鹿者っ！

その叫びを口にしないことでフウルウは精一杯だった。

\*\*\*

「いらっしやいませーっ………って、なんだ。男か」

その人影の正体を把握し、ディーナザードは露骨に落胆した。

「酷い言われようだな。中央からの応援を呼んだのは君の方だろうか？」

——ええ、そうですね。でも、むさくるしい男よりは素敵な女の子が来てくれた方が嬉しい。それが人情というものではありませんか。

……と、ディーナザードが抗議の声を挙げる前に、彼はすたすとシャービス亭一階の食堂へ上がりこんでくる。

彼が客席に座ったので、いやいやながら、杯一杯の水を出してやった。が、彼は手を着けようともしなかった。ついでに言えば、何も注文をしようとはしなかった。しかも、彼は周囲を見渡して、

「流行っていない店だな。経営は大丈夫なのかね？」

とか、言いやがった。

「大きなお世話です。この時間帯は空いているものです」  
すると彼は「そうか……」と、相槌を打つ。

もつとも、彼がこの時間帯を狙ってやってきたのは明白だった。午前中は授業で子供たちが一杯だし、昼時や夕方以降は飯や酒を目当てに大人が集まってくる。しかし、それ以外の時間帯は特に用がない。だから、シャービス亭の午後というのは比較的空いているのだ。そういう時間帯にやってきたということは、今からの話は『それ程、隠すものでもないが、あまりおおっぴらにされては困る』類のものなのだろう

「それにしても、久しぶりだね。ビントハッシーシュ」

「……今のあたしはヌーフの娘です。ハッシーシュの娘ではありませんよ」わざと拗ねた顔をして、ディーナザードは付け足した。「大体、可憐な乙女に似つかわしくないじゃないですよ、《麻葉の娘》なんて」

「なるほど、確かに現在、君は戸籍上、ヌーフ・イブンムンキズ・アルハッシービスの一人娘となっている……しかし、彼は、君を正式に養女として迎えた後、死亡しているね」

男は薄く笑った。「これに関して、麻葉娘の意見は？」

「直接の死因は敗血症。とはいえ、消化器系の癌も併発していましたから、老死というのが適切な表現でしょう」

「……麻葉娘と呼ばれることを否定しなかったな？」

「とうとう最後まで、人を救う薬を扱えなかった娘ですから、麻葉娘と呼ばれても致し方ありません」

「……すまない」と、彼は意外なことを言った。「君が彼を殺したことを疑っているわけじゃないんだ。君が解雇される前に彼が既に病に犯されていたことはこちらでも調査済みだ」彼の言葉からは誠実さが滲み出ていたが、ディーナザードは「お疲れです」とあっけ

らかんと答えるのみである。

「……では、そろそろ、本題に入ろうか」

「ええ、あたしとしても不愉快な話題からは、早く離れたいですわ」

言ってから、ディーナザードはちよいと奇妙な感覚に襲われた。

——どうやら、あたしは不愉快に思っているらしい。

しかし、眼前の男はその発言を聞き流した。

「ここに表れたそうだな。《再生への導き手》が……」

「はい。あくまでもそう名乗っていたに過ぎませんが、物腰や言葉遣い、使用した巫術からは否定する要素を見出せませんでした」

「おそらく、本物だよ。ここ数週間、連中の動きが妙だったからな。『聖娼』が動いたという情報もある」

「《アトラハシスの巫女》が直々に……。では、本当に《再生への導き手》が活動を再開したのですね」

再生への導き手——自らは《小さき神々》を名乗る彼らこそ、帝国の歴史上、最も巨大で、最も著名で、最も古い反政府組織である。

何しろ、その歴史は帝国創設時にまで遡る。

アツザフル帝国の創設は《建国の四聖》による《狂王マルドウツク》の放逐、すなわち、易姓革命による先のウトナピシュティム王朝の打破から始まる。その構図自体は珍しいものではない。《狂王マルドウツク》が悪政を敷き、人民を苦しめた故に《建国の四聖》を筆頭として、民衆が立ち上がる。そして、見事《狂王マルドウツク》を神去らせ、ウトナピシュティム王朝四百年の歴史に終止符を打つ。それと共に《建国の四聖》の一人であった《覇者》アジルダハーカが皇帝となり、今に至るまで二百年にも及ぶアツザフル王朝の歴史が始まった——というものである。

はつきり言って、どこにでもありそうな話だ。フウルウならば、胡散臭がりながら、固有名詞を入れ替えただけで、通用する事例をいくらでも並べることができるだろう。

実際、この《狂王マルドウツク》が、王であった由縁というのも、六百年前に当時の為政者であったジウスドラ王朝の《暴王エンリル》とやらが悪政を敷き、人民を苦しめたというので、《狂王マルドウツク》の祖先がこれを神去らせ、ジウスドラ王朝三百年の歴史に終止符を打つと共に、ウトナピシュティム王朝を開いたから——というどこかで見たとような図式故だ。あまりにもあまりなので、フウルウなどは、ジウスドラ王朝の実在を疑っていたぐらいである（最近、実在の証拠となる遺跡が発見されたとかで、フウルウは驚いていた）。

しかしながら、フウルウが帝国創設について一箇所だけ真摯に評価している箇所があった。それは政治体制の移行だ。勿論、その変化の具体例を細かく挙げれば、きりがない。だが、フウルウに言わせると

——その変化を一言で言えば、神の時代から、人の時代へと移り変わったということだな。

ということになる。（仮に実在するとしても）ジウスドラ王朝からウトナピシュティム王朝への移行は、所詮、神権政治という同じ線路の上で走っている車が変わっただけだった。

しかし、《建国の四聖》が開いたアツザフル王朝は違う。ウトナピシュティム王朝から、



アツザフル王朝への移行は、走っている車だけではなく、走っている線路そのものが変わったのである。神権政治の線路から、王権政治の線路へ、神々の時代から人間の時代へ移行したのだ。それにより、人が神の——厳密には神の名を騙る一部の者の——奴隷であった時代、神話の時代に終止符を打ち、人による人の時代、すなわち歴史を創った。

例えば、先の話題に出てきた第一級禁制巫術——前王朝版《傀儡の術》がその典型だろう。ああいう技術がまかり通っていたのは『人間は所詮神々の奴隷に過ぎない』という通念が一部の特権階級だけではなく、民衆にまで悉く染み渡っていた証左である。

だから、当時、洪水が起これば、それは神罰に他ならなかった。故に神に生贄——勿論、ヒト——を捧げねばならなかった。治水事業を望む声は決して起きなかった。何故なら、神の怒りである自然災害は、人間の努力では左右できないと考えられていたからだ。そもそも、当時の宗教によると、人間とは神々に奉仕させる目的で、神々が粘土から創造した奴隷に過ぎないとされ、人の世のすべては神々のなすがままとされていた。実際、当時の人類の生産力、技術力では、激甚たる自然災害を防ぐ術などあるわけもない。ただただ、神の機嫌を取るために必死だったのも、やむをえなかったのかもしれない。

当時の特権階級が生み出した言語巫術はその傾向に拍車をかけた。何しろ当時《精霊》は神秘の存在である。その頃の為政者であった世襲制巫術師たちですら、《精霊》を本気でできるのも、知識や技術のおかげではなく、《神々の眷属》だからだと、万人が（下手をする、当の本人たちですら）信じきっていたのだという。

そんな世界では、絶対的超越者である《神々の眷属》に逆らおうとするものはいない。だから、民衆は人間ではなく、奴隷であり、《傀儡の術》も当然の技術として認められていたのだ。

——帝国によって、誇張されているとはいっても、この社会通念そのものを打ち破った  
ムラデウリイリイチャハラ 《建国の四聖》が讃えられるのは、至極当然のことだろう。

と、フウルウが手放しで賞賛していたのは、ディーナザードにとっても印象深い。その裏に、世界に認められない自分の鬱屈を『世界の方が間違っているのだ！』と放言したいフウルウ自身の心理を、当時の社会通念そのものをひっくり返した《建国の四聖》に重ね合わせている様がありありと透けて見えていた。

いや、あの野郎のことは、まあ、どうでもいい。

肝心なのは今組上に上っている反政府組織《再生への導き手》サラフ・アルムイードについて、だ。

この時の革命で、かつての支配階級であった世襲制巫術師たちはいわゆる《中原》から、一掃された。この際、放逐された自称《神々の眷属》であり《小さき神々》でもあった旧き貴族たち、旧世襲制巫術師階級は、北東の辺境へと亡命する。そして、その旧世襲制巫術師階級は彼女らを慕うもの達（こういう者達がいたということは、当時のウトナピシユティム王朝が言われているほどの巨悪ではなかったのでは——と、フウルウは反体制的で危険な指摘をしている）と共に多くの国々を成した。アツザフル帝国に比べると卑小ではあるものの、決して侮ることのできないこれらの国家群は現在ではいわゆる《北東三国》という形にまとまっている。

しかし、その世襲制巫術師たちが皆、《北東三国》に亡命したかというのと、そうでもない。アツザフル帝国の内側の残った者も相対的には少数ではあるが、絶対的には多数いた。こ

れはさらに二種類に分類される。

一つはその革命初期から、アツザフル王朝に協力的だったもので、反ウトナピシュティム王朝Ⅱ親アツザフル王朝の立場を貫くことで、平和的にアツザフル帝国の内側に居場所を見出したものたち。これは現在完全に帝国と融和している。

問題なのはもう一つの類で、未だに親ウトナピシュティム王朝Ⅱ反アツザフル王朝の立場に拘り、地下に潜り、反政府運動として、時々、要人暗殺などの破壊活動を行なっている連中である。これが《再生への導き手》——の言うなれば、原型である。

この《再生への導き手》もかつてはすぐに逐滅されると考えられていた。たしかに、彼女たちはその性質上、皆が皆かなりの腕の巫術師たちであり、また、『無知な庶人ども』に比べると相対的知識人たちでもあった。脅威ではある。だが、所詮は少数派に過ぎない。《北東三国》の類が彼女たちをあらゆる意味で支援しているのは、子供でもわかる構図だったが、その《北西三国》もまた安定期に入ったアツザフル帝国に比べると、明らかに国力で劣る。三国まとまっても、象の前の蟻に過ぎない。巫術における経験や技術という部分では帝国も譲らざるをえないものの、圧倒的な物量の前ではそれも大した意味を成さない。大体、その《無知な庶人ども》という名の民衆の支持がないのでは、地下活動にも限界がある。

……と、というのが、楽観でしかなかったことを認めざるを得なくなってくるのが、今から、百年ほど前の話だ。いや、正確には、二百年前から、進行していた事態に帝国が——いや、人類がようやく気づき始めたのが、百年ほど前なのだ。

精霊衰退現象——俗に言う《神々の黄昏》である。

この現象自体がもたらす結果はそれ程難解なものではない。要するに大気や大地の中に含まれる精霊の密度、総数がどんどん減っているのだ。それが進化した現代では、なんと、精霊密度が二百年前の半分しかないという有様である。この現象は一部ではずっと指摘され続けてきたことだが、公式に、また、一般にそれが確認されるようになったのは百年ほど前の話になるというわけだ。

こんなのための皇帝直属の学術機関——ということ《ウルル》においても、さっそく、その原因調査と事態改善が模索された。が、事態の改善はおろか、その原因でさえも、今もなお暗中模索という状況である。

しかし、只一つだけ、はっきりしていることがある。いくつかの観測記録から逆算すると、この《神々の黄昏》は二百年前に始まったということだ。これだけは多くの研究の一致した見解となっている。

では、その二百年前にあったことといえば……そう、狂王放逐による易姓革命、神権政治の棄却である。

因果関係ははっきりしない。しかし、帝国情報部の有形無形の妨害を潜り抜けて、発表されたその《ウルル》の発表は帝国に、いや、世界に激震を走らせた。

言うまでもなく、精霊はこの世界を支える柱だ。これなくして、現行の人類社会は成り立たない。そこからの脱却は今もってなお図られ続けているが、遅々として進んでいない。フウルウの如き知識人のほとんどが、ある程度《巫術師》としての側面を具えていることがその好例である。

だから、何とかして、精霊を《再生》させようとする試みは未だ行なわれ続けているし、

その実現は誰もが願っていることでもある。

帝国の中で潜伏しているだけの存在だった親ウトナピシュティム王朝Ⅱ反アツザフル王朝の世襲制巫術師たちが息を吹き返し、《再生への導き手》と呼称されるようになるのはこの頃からだ。

因果関係ははつきりしない。だが、神権政治が滅んだ直後から、精霊が減衰し始めたのなら、やはり、それは何か結び付きがあるのではないか？ 我々の中から、神々を敬う心が乏しくなっていたから、《神々の黄昏》が始まったのなら、もう一度、神々を敬う心を取り戻せば、神権政治を復活させれば、精霊も甦ってくれるのではなからうか……？

そんな《再生への導き手》に都合のいい発想は、民衆の中からもごく自然に芽生えていった。

おおっぴらに《再生への導き手》への支持を表明するものは少ない。その《神々を敬う心》とやらと、精霊の復活を結びつける信頼できる実験結果もまたないからだ。ただし、それは『世界規模で《神々を敬う心》が足りないからだ。狭い硝子部屋の中の、一人か二人くらいの《神々を敬う心》しか試せない実験があてになるか！』という意見を出されると、そもそも議論にならない。

そんなわけで《再生への導き手》はこのアツザフル帝国で隠然たる勢力を誇っている。彼女たち《再生への導き手》とアツザフル王朝との衝突は、時に言論で、時に暴力で、幾度も起こり、今でも、一進一退の攻防が繰り返られている。

とはいえ、それにも、波というものはあり、ここ数年は《再生への導き手》の活動は沈静の兆しを見せていたのだが……。

「ああ、間違いなく《再生への導き手》が活動を再開した」

「ここ、数年大人しかったのに、これまた、どういう訳ですかね？」

「君はどう思う？」

「そうですねえー。やっぱ、あれじゃないですか、軍縮？」

「ディーナザードの意見に「ほう」と、彼は驚きを隠さなかった。」

「そりゃ、軍縮するのは結構ですけど、ちゃんと雇用の裏づけがないと駄目ですよ。軍事訓練を受けた失業者なんて、武闘派反政府活動家の最有力候補ですから」

この意見は口からでまかせという訳ではない。ディーナザードは自信を持っている。ところが、彼は

「……意外だな……」と、呟いた。

「何がです？」

「君が政治について、口に出すということだよ。実に驚いた。何しろ、上から見た物言い、地に足のついていない生き方を何よりも嫌っていたのが、君だからね。以前では考えられないことだよ。……これも同棲相手の影響かい？」

「……？」

ディーナザードの脳裏にまず浮かんだ『同棲相手』はあの可愛らしい黒髪の少女だった。が、しばらくしてから、もしや、あのフウルウが『同棲相手』と思われているのではという極めておぞましい発想が浮かび上がってきた。思わず、眼前の男に射刀を投げつけたくなったが、ここで、痛癢を起こしては鶴ちゃんのためにもならない——ということでは、

「あたしも馘首なってるから、色々考えたんですよ」

と、穏当な返答をするに留める。屈辱で腸が煮えくり返りそうになっていたが、我慢した。

すると、眼前の男は「そうか……」と何を考えているのか読み取れない相槌を打った。そして、「だが、それは間接的な原因ではあっても、直接的な原因ではないな」と断言した。

「……と、言いますと？」

「記録では、人造人間《鶴姫命》八号」と記されている……」

「は、はあ、又エヒメノミコトですか……」

勿論、デイナーザードは驚いている。魂銷魄散の寸前である。しかし、全身全霊をかけて、それを隠している。少々心臓の鼓動が乱れたものの、男には気付かれなかっただろう——と思いたい。

「詳細を君に伝えるわけにはいかない。だが、《再生への導き手》はこれを精霊復活の鍵ではないかと睨んでいるようだ。勿論、切り札——というよりも、これに使われている技術があれば、もしかしたら、神々を現世うつしよに黄泉返らせられるかもしれない——という程度のものだろうがね」

「そりゃ、また、ご苦勞なことで」

デイナーザードは再び、精一杯あっけらかんと答えた。

「……：君は心当たりがないと？」

「報告書に書いたとおりですわ」

しばらくの間の沈黙があった。男が何を考えているのか、何を知っているのか、デイナーザードにはわからない。というか、頭の中は「人造人間《鶴姫命》八号」という言葉についての疑問で一杯だった。しかし、どうせ、尋ねたところで、まともな答えが返ってくるわけもない。だから、口を噤んでいた。

「ありがとう」男は実にこの男らしくないことを言った。「今後の参考にさせてもらう」

「……で、こちらの要請はどうなるのですか？」

「君とこの村の安全は十中八九保障できる。今のところ……だがね」

「曖昧な話ですね」

「我々として、全能ではない。《再生への導き手》の脅威から、守らねばならないものは、この村だけではないのだ。ただ、全能ではないのは《再生への導き手》も同じだよ。この帝国の中で割ける人員には限りがある。我々がこの辺りの治安維持に重点を置いている現状では、彼らもあえてこの村に危害を加えるような危険は冒さないだろう。今のところ、我々の方が帝国の内側では圧倒的だからね」

「その重点配備が解かれたら？」

「その時は、《再生への導き手》のこの辺りの勢力が壊滅するか、《再生への導き手》がこの辺りからの興味を失っている。彼女らとして、君一人に構っている余裕はないさ」

「しかし、あなた方にとってはこんな村、いくらでも捨て石にできるのでは？」

「何を怯えている？」と、男は微笑を浮かべた。「君ともあろうものが……今のところ

《再生への導き手》よりも、単純な盗賊団や無法者たちの方がこの村にとっては余程危険な存在だよ。無論、これは《鶴姫命》という要素を抜いたらの話ではあるがね？」

「……：……」

「それよりも、こちらとしては今帝都へ向っているというピヤオ・フウルウという男の方

が気になる……」

「どういうことですか？」

「あの男、知識人を気取っている。で、ありながら、社会的には成功していない」

「歳だけ無駄に重ねた子供ですよ。すぐにかつとなるし……」

「そうだ。しかも、自意識が異常に肥大化しており、自分が社会から認められ、讃えられるのが、当然だと思っている」

「ええ、まさにそんな感じですよ」デイーナザードは我が意を得たりと言わんばかりに頷いた。「そして、現実には甘くない。先生がこんな田舎で燻っているのも至極当然の話です」

「ならば、《再生への導き手》の協力者、あるいは構成員である可能性は？」

「は？」デイーナザードは顎が外れそうになった。

「親から甘やかされて育って、本ばかり読んで生きてきて、だから、人と交わる術を知らない。故に実社会に出た途端失敗する——典型的な負け犬の一種だ。こういう輩は自分を認めない、讃えない社会に激しい敵愾心を抱くことが多い」

「ええ、たしかにその辺りはまったくもって、然り然りという感じですが……」

——……しかし、この人も叩き上げだよなあ。

デイーナザードは心中で嘆息した。

この手の経験則はどうしても主観が混じる。己の願望の反映にもなりかねない。その危険を犯しながらも、自身の判断を信じられるのだから、いやはや大したものだ。似たような傾向のあるデイーナザードとしては、黙って反面教師とさせてもらおう。

「その反社会的傾向が反政府的傾向となり、反アツザフル王朝という点で《再生への導き手》と結びつくという可能性は？」

「まさか」と、自分でも信じられないくらいあっさりデイーナザードは否定の言葉を紡いだ。「ピヤオ・フルウが《再生への導き手》に組することはありえません。思想的方向性が違い過ぎます」

「彼は帝国に忠誠を誓っているか？」

「いえ、単純にあいつは人間が好きなのですよ。人間を愛しているといってもいい。不器用ですけどね。彼は、神よりも人を、精霊よりも人間を、世界よりも自分自身を上に出ています。人の利益に沿っているうちは、神の存在を容認しますが、人の不利益になるのならば、神の存在を排斥するでしょう。《再生への導き手》とは相容れません」

——というか、《再生への導き手》も、あんな社会不適合者を同胞に迎えるのはお断りなのではないだろうか？

実際のフルウを知悉するデイーナザードには、そんな思いが沸々と湧いて出てくる。

だが、眼前の男には異見があるようだ。

「しかし、現世の実利の前には、思想信条など吹き飛ばすこともあるだろう。机の上に金を積み上げられたら？ あるいは胸元に刃物を突き付けられたら？」

デイーナザードはその危惧を鼻で笑った。

「彼は学者気取りかもしれませんが、本質的にはオタクです。現実が見えていません」

そこで、デイーナザードはふと、

——先生なら、『私が君如きと同じ視点を持つ必要はないのだよ』とでもいうだろうか？ と、考えた。考えた後、どうして、自分はネチネチと野郎について、考えたり、語った

りしてしまうのかと心底不思議に思った。しかし、奇妙にもその唇は滑らかに彼の男について、紡ぎ続けていた。

「だから、ピヤオ・フウルウはその身に死が差し迫っても、それに気付くことなく、己の我を貫くでしょう。……あたしとは違って」

\*\*\*

その闇色の正体はおそらく鶴とフウルウにしかわからなかっただろう。

あの《夔》だ。鶴は一度、肉塊に戻したその闇色の大鎌を、弾き弓の如く、投げ槍の如く、とてつもない速度で打ち出したのだ。

しかし、正体はわからずともその意味がわからぬ彼らではあるまい。

少女の右の肘から先を覆っている異形の肉塊が、そのまま、巨大な蛇のように伸びてゆき……一人の警官の目の前の大地を大きく抉っているのだ。

狙われた警官が、わけのわからぬまま、ほとんど本能的に飛び下がらなければ、この蛇は人間の体など易々と貫き通していただろう。——確実に殺されていた。

「これはまずいぞ！ ラシードっ！」

「隊長っ！」

「うむむ……やむをえん」数々の呼び声に、苦渋の表情で《アル||イクシルの手先》の男——他の警官たちの呼びかけから考えて、おそらくラシードは決断した。「殺傷性攻撃を許可する！」

一瞬辺りの空気が冷え込み、一人の警官が静かな声で尋ねた。

「いいんですか……まだ、子供ですよ」

「そうだ。だが、あの少女は我々を殺す意思と能力を持っている。私のわがままで諸君らの命を危険にさらすわけにはいかん。まして、危険にさらすのが、我々の守るべきものならば、なおのこと！」

決然たる意思と共にラシードは宣言した。だが、周囲の者たちも負けてはいない。

「イブン||ムハンマドさん、既に周囲の民間人退去は完了しています。いかにあの魔女が強力な巫術師だとしても、我々の手足の一、二本の犠牲で取り押さえることも……」

「俺は命令違反には慣れてるんでね」

「な、何を言っている。今の巫術を見たらう！ 責任は私がとる！」

「だからこそ、あんたに子供殺しの汚名を着せるわけにいかねんだよ、ラシード」

「守るべきものも、我々の隊長の名誉も守り抜いて見せます！」

「なあに、俺たちだって、命は惜しいですからね。本当に危ないと思ったら、覚悟を決めますよ。ですが、そうでない限りは、我々は我々の全力を尽くすのみ！」

「く、馬鹿共めが……すまん……いくぞ！」

「へえ……これはよほど、死にたいようですね。クククっ」

このうちどれが鶴の発言であるかは記すまでもないだろう。そして、そのことがフウルウの現状を克明に示している。

——…………最悪だ。

まさか、こんな演劇めいた現場に立ち会うとは思っていなかった。しかも悪役の立場で。

ちなみに、フウルウはまったく妨害を受けずに、巫術の発現には成功した。ただ突っ立っていただけだったためにラシードがフウルウを侮っているのか、あるいは気付かなかつたのか。どちらにせよ、始めから、詠唱しないか、中断して、ここまで彼らの戦意が高まる前に、交渉に持ち込むべきだったという後悔が酷くて、あまり発現に成功したことが喜ばない。

「『……砕けよ。獣人の縛鎖。真の力、ここに示し、偽りの力、ここに顕せ。《虎体狼腰》』循環器系強化能力《神速の翼》模倣版、視覚系擬似時間加速能力《神魔の瞳》模倣版、筋肉系強化能力《神力の腕》模倣版——その他諸々、近接戦闘に有効な身体強化系巫術百八種類を複合同時発動。

これだけの無茶をすれば、常人なら、即死するだけの負担が肉体にかかる（ついでに、巫術面でもこれは相当な無理なのだが、そこは鶴及び《雙》に代行してもらっている）。しかし、鶴の傀儡となり、大幅な生理機能調整が行われている現在のフウルウならば、耐えることができるのだ。

本来、《傀儡》とはこのように用いることで、どうしても肉弾戦に弱い巫術師の欠点を補う目的で、女媧娘々が開発したものらしい。ただ、そのための生理機能調整が医療行為に通じるところがあったために、鶴はフウルウの傀儡化に踏み切ったというわけだ。

——そして、この《傀儡》の力があれば……力づくで話し合いに持ち込める。その確信があったから、状況の経過を苦渋のまま見逃していたのだ。

狙うはラシード。一人一人が非常に練度の高い動きを見せているだけに指揮系統の破壊は大きな意味を持つ。本来なら、弱いところから狙うのが常道だが、仕掛けるべきは交渉なのだ。

尋常ならざる踏み込みで、ラシードに向かう。

——とりあえず、彼の戦闘力を奪う！

「カレイチークファンター  
「傀儡的拳打っ！」

自分を奮い立たせる意味で、雄叫びと共にフウルウは殴りかかる。

ここにいる警官はみな訓練を重ねた強者たちばかりなのだろう。だが、それはあくまで人間の範疇での話である。今や超人であるフウルウの動きにはついてこれるはずもない。

さすがにラシードは真正面からすさまじい速度で向かってくる化け物に、唯一、非殺傷用の棍で対応するが……。

——今の私の前には遅すぎる！

軽く、横に踏み込み、彼の棍を避け……、

「あれ……？」

何故、軽く踏み込んだだけなのに、目の前のラシードがすさまじい速度で横に吹き飛んでいくのだろうか？

いや、横に吹き飛んでいるのは……もしかして、私の方……？

どかーん。

「し、死んだか……？」

土煙の中、ラシードはポツリとつぶやいた。

真横に——とはいえ、十分な距離があったはずの——家屋、しかも、石畳の壁に凄まじい速度で、ピヤオ・フウルウは衝突したのだ。即死してもおかしくない。しかし……、  
がらがらっ！

「き、貴様、何者だ？」

もう、ラシードは相手を人間と思っていないだろう。自分に殴りかかってきたと思っただけ、いきなり、直角に進路変更して、家屋に激突しに行ったのだ。しかも、未だ朦朧たる土煙は収まっていないというのに、フウルウはあっさり立ち上がっている。所々に出血が見られるもののその挙措はまったくの無傷を思わせるものであり、さらに……、

「え、いや、ミナレットの村で教師をやっているピヤオ・フウルウと申すもので……、あ、歴史学者志望でして、本も自費出版ですが何冊か……」

馬鹿正直に自己紹介を始めたのだ。

「ふ、ふざけるなっ！ どうして、ただの歴史学者志望教師が、直角に曲がって、石畳の壁に突進して、貫通して……しかも、平気なんだっ？」

「はあ、まったくごもつともで……」フウルウは心底困っていた。何とか交渉に持ち込みたいのだが、どうしても話が逸れてしまう。「でも、平気というわけでも、ありません。痛覚を制限していますから、なんとか、こうして普通に話してられますけれど、いかに身体機能を強化しているとはいえ、石畳の壁に激突したわけですから、あちこちに怪我を……」

「な、何をわけのわからんことを！」

あまりに異常な事態に、二人して、結構、間抜けなことをやっている。

しかし、なるほどな——フウルウは小さく舌打ちした。

鶴の『傀儡にするのはなるべく修練を重ねた屈強の戦士を慎重に選ぶように……って、お師匠様が言っていました』という言葉の真意がよくわかる。

傀儡化により、一流の戦士に比肩する身体機能を得、さらに《虎体狼腰》フーチーラヤオを用いることで人間の限界を超えられるようになったが、所詮は荒事とあまり縁がなかったフウルウである。最終的には慣れなのだろうが、経験の浅すぎる頭が体についていけないのだ。

全力突進中に色々とくだらないことを考えるだけの思考能力。軽く横に躲した程度で大きく横に飛び出して、石畳を突き破るだけの運動能力。その他諸々を兼ね備える傀儡の力を手に入れても、これではどれだけ活用できるかもものやら……。

だが——フウルウは観察した——今の行動にまったく効果がなかったわけではない。今の行動で、警官隊の包囲に穴ができた。物理的にも、精神的にも。今なら、傀儡の力で鶴を抱え込んで、この場を脱出できる。

しかし、ここはあえて、この場に留まり、彼らと話し合うべきかもしれない。フウルウはそう思った。ここで逃げたら『誤解』を助長しかねない。……勿論、実際『誤解』ではない可能性もある。だが、それは話し合ってからでも、遅くはない。ここで逃げれば、ただ家屋を破壊しただけの犯罪者だ。

そう考えて、両手を挙げようとして……。

フウルウは突如、冷たい声を出した。「鶴……離脱するぞ」

「え？」



一瞬で少女の下に駆け寄ったフウルウは迷わず、鶴の首根っこを掴む。鶴は異論があったようだが、傀儡の力に十二の少女が敵うはずもない。力づくで、鶴をつれて、逃げ出した。

たとえ、右手に暴れる鶴の首根っこを掴んでいても、追いつけるものはいなかった。

\*\*\*

「どういうことですか！」

人気のないところで改めて落ち着いて話そうとしたが……落ち着けるわけがなかった。

「それはこっちの台詞だ！」

以前にもこういう事があったと、フウルウの冷静な部分が告げていた。だが、いかんせん、灼熱の部分が強すぎた。

「君は《パオラオーシーフ炮烙之法》を唱えてたろう！」

ラシードたちがフウルウに気を取られている間に鶴はこっそり言語巫術を唱えていた。

その祝詞を傀儡の超人的知覚で捉えていたのである。「どういうつもりだ！」

鶴はあっさりと答えた。「連中がフウルウさんに気を取られていましたら、一気に殲滅を図ったんですよ」

「君は彼らを皆殺しにするつもりだったのか！」

《パオラオーシーフ炮烙之法》——アツザフルにおいてはそれほどでもないが、フウルウの故郷である《夏アルシヤターナー・カバ・アスワトの国》においては有名な戦闘用言語巫術だ。また、あの《アルシヤターナー・カバ・アスワト黒衣の魔女》が愛用した巫術としても著名である。当然、フウルウも知っていた。だが、大きな干渉力が必要になるため、精霊密度が低くなった今では最早使い手はいないと思っていた。しかし、鶴なら使えてもおかしくなく、また利用価値も高いだろう。

そして、この巫術の殺傷力は高い。

極めて高い。

何しろ、ハロゲン酸化剤、硼素、アルミニウム粉末、珪素粉末、マグネシウム粉末……等々で構成された固体爆薬を精霊に生成、収束、気化させる——火炎系最強と言われる巫術である。発現した強燃性の気体と爆発性の粉塵は巨大な炎の柱——自己分解性の不飽和炭化水素を発生させるため、酸素がなくとも燃え続けるそれは『炎』と呼べるほど生易しいものかどうかは異論があるもの——を織り成し、巫術師の腕の動きに合わせて打ち出され、射線軸上と着弾地点で自由空間蒸気雲爆発を引き起こす。

直撃すれば、勿論、骨も残らない。仮に回避したとしても、爆鳴気による空間爆発は強力な衝撃波を発生させ、周辺気圧を通常の十倍以上にまで引き上げ、鉄を沸騰させる程の高温を撒き散らすのだ。急激な気圧変化による内臓破裂だけでも、あの警官たちを皆殺しにするに足る。いや、爆轟によって発生する衝撃波の本身は、酸素を強大な還元剤に奪われ尽くした死の風だ。巫術や神御衣で防御できる鶴や傀儡化しているフウルウならばともかく、低酸素という猛毒の空気は吸い込んだ者を容易く窒息死させる。既に離れていると思われる民間人にも被害が及ぶこと間違いなしだ。

つまり——鶴はあの場にいた人間を悉く殺し尽くそうとしたのだ。

そして、そんな巫術を愛用していた彼女彼女の人格も推して知るべしである。

「そもそも、あの人、警官だったぞ！」

これはフウルウが本当に言いたいことではなかったが、美味しく言葉が出てこなかった。

「だから、どうしたっていうんですか？」

「どうしても、警官にアル・イクシルの手下がいるんだよ！」

「知りませんよ、そんなこと」鵜は子供のよう<sup>こども</sup>に頬を膨らませた。「フウルウさんは警官なら、無条件で正義の味方だと信じているんですか？」

勿論、信じていない。若い頃、故郷の警察機構の腐敗を散々に非難して、回りから顰蹙<sup>ひんしゆく</sup>を買ったのは他ならぬフウルウだ。そして、そのことについてはまったく後悔していない。しかし……、

「では、君は警官なら、無条件で悪の手先だと信じているのか？」フウルウはそう言い返さざるを得なかった。「ついでに言うと、ああ、こんな言い方はしたくないんだが、君が悪の手先でないということも信じられない」

鵜の声の中に明らかかな悲しみが混じった。「……フウルウさんはわたしが信じられないんですか？」

「少なくとも、この街は平和だ。この平和に彼らが貢献しているのなら、彼らを評価すべきだし、この街に入ってから、その裏付けをいくつか僕は確認している。役人にも何度か出会ったけれど、みんな親切で丁寧で職務に忠実だったろう。ラシードが君を見つけるまで、警官嫌いのこの私が警官を見て、不快に思ったことすらなかったんだぞ」

「だって、あいつは……」

「アル・イクシルの手先だというのか？ アル・イクシルが悪の権化だという仮定の上に、ラシード・イブン・ムハンマドがその手先だという仮定を重ねても、その部下と思われる警官多数ははたして、いきなり殺傷性戦闘用言語巫術で殺されるのに値するのか？ 君なら、非殺傷性のもので済ますこともできたんじゃないのか？」

「……フウルウさんはあいつに何度も追っかけられていないから、そんなことが言えるんですよ」鵜は珍しく愚痴をこぼすような口調だった。

「はつきり言おう。その証言自体が信用できない。今までもいくつかの疑問点があったが、いきなり人を殺そうとする君の行動で、さらに信用できなくなった」

「……！」鵜はなんともいえぬ歪んだ表情で、「そうですか、フウルウさんはよっぽど温厚な人生を営んでいるのですね」

この場合、同じ次元で感情をぶつけるのは愚かな行いなのだろう。だが、この時は己の愚かさを省みることもなかった。

「甘い奴だと思ふなら、思えばいい。だがな、私と同じように甘い奴であるが故に、君が子供であるというだけで、直接的攻撃を躊躇い、殺傷性攻撃を避けていた彼らへ、君よりも共感できない理由がどこにある？」

「譲れないことを譲らないために必死になることの何がいけないんですか！」

「ふん。それも、お師匠様が言っていたのか？」

明らかにフウルウの声には軽蔑と皮肉が混じっていたと思う。鵜の瞳が再び瞋恚の焰に彩られかけるが、その前にフウルウは先手を打つ。

「……すまない。私の最後の言葉は卑怯だった。同様に君の最後の言葉は正当なものだ。しかし、今の私にそれを冷静に考える余裕がない」

突き放すような言い方になっていることはわかっていたが、どうしようもなかった。

「とりあえず、宿を探そう。いくら、警察の目が行き届いているとはいえ、一晩くらいなら大丈夫な宿はあるだろうさ」

——畜生。

聡明な少女が溢れ出す感情の奔流にその瞳が潤ませていることも、無視するしかなかった。

——ディーナザードが見たら、私は八つ裂きにされるだろうな。結局、私にこの娘の保護者は無理だったのか……。

\*\*\*

アツザフルに来て、まだ言葉が不自由だった頃、亜父はフウルウに大変良くしてくれた。

フウルウはそんな亜父に感謝と尊敬の念を抱いていたものの、しかし、当時の己を振り返ると、赤面せざるを得ない。

亜父はフウルウの面倒を何から何まで見てくれていたが、それがフウルウの卑しい自尊心には屈辱だったのだ。それまで、故国でフウルウは孤高の生き方を貫いてきた。党争に破れ、半ばやけくそで出奔して来たものの、他者の世話に甘んじることなく生きてきたことに、フウルウは誇りを抱いていた。

ところが、アツザフルに来てからは、何一つそのようには行かなかった。何しろ、言葉が通じない。文字は予め勉強してきたので、筆談ならば、さほど問題なく行うことが出来た。が、その文章力はいくまでも『外国人にしてはそこそこ』という水準であり、かつてのような『超一流の美文家』には決してなれなかった。それに、いつもいつも筆談というわけにはいかない。いかんせん、まどろつかしいし、そもそも、アツザフルとて、識字率はそれほど高くない。そして、口頭での意思疎通という点では、その頃のフウルウは十歳の孺子にも劣った。実際、その稚拙なアツザフル語を一笑されたことは多く、一蹴されたことも少なくない。相手が誠心誠意、フウルウの話に耳を傾けてくれたとしても、フウルウ自身の意思は十分の一も伝わらない。膨大な思索があっても、それを活かさないことにフウルウは苦しんだし、それを嘲うものにフウルウは憤った。だが、その問題を解決するにはフウルウ自身がアツザフル語を習熟するしかなかったし、それには時間が必要だった。それだけでも狷介なフウルウには屈辱だった。しかも、そうやって、フウルウが苦しんでいると、必ず手を差し伸べてくれる者がいた。

それが亜父だった。

それはフウルウにとって、心底ありがたい厚意だったし、必要な助力でもあった。しかし、他人の手助けを甘受せねばならない——それも一度や二度ではなく、常に。それはフウルウにとって、己の稚拙なアツザフル語を軽蔑される以上の屈辱であった。

そして、その苛立ちをフウルウはよく亜父にぶつけていた。フウルウ以外には亜父にしかわからぬ母語で、『余計なことをしないで下さい。そのくらいは自分でできます！』と怒鳴ることがしばしばあった。

……明らかな筋違いである。そのようなことをやってしまっていたのは、フウルウの中に、亜父への甘えがあった証左だろう。

さすがに当時のフウルウも、怒鳴った後はハッと正気を取り戻し、アツザフル語で謝罪の言葉を告げていた。勿論、篤志と寛容の人である亜父はそんなフウルウを必ず笑って許してくれた。

だが、当時まだ十四だった少女は——小麦色の肌と紅茶色の髪のディーナザードは軽蔑を隠そうともせず、その奇しき双眸で見つめていた。

その度に、フウルウは己の愚かさを思い知らされた。

彼女と一つ屋根の下に二人きりで暮らし出してから、もう随分経っている。また出会った頃に比べれば、何だかんだと仲もよくなっている。だが、未だにディーナザードが最後の一線でフウルウを認めていない。それは彼女が自分の醜悪さを知っているからだろう。

そんなディーナザードがたった一度だけフウルウに手紙を出したことがある。

フウルウが講師の仕事を探しに帝都に出かけているときのことだ。

その手紙を受取った時、フウルウは妙だなと思った。ディーナザードは自分を明らかに嫌っている。たしかにフウルウは時々数学を彼女に教えているが、それはディーナザードが数学好きで、自分はアツザフル語で講義ができるかを測ってみたかった——それだけの利害だけで繋がった関係である。

また、ディーナザードにしてみても、フウルウに手紙を出す暇があったら、少女を口説いていた方が充実した時間であったに違いない。

それ以上に元来他者と交わることに億劫なフウルウは

——面倒くさいな。

と思いつながら、手紙を開くと……そこには『父重病、至急戻れ』と簡潔に書かれていた。

さて、どうする？——とその時のフウルウは迷った。

実はその時、講師の仕事の面接が二次まで進んでいたのだ。しかし、ここで、帝都を離れては、確実にその話は台無しになる。それに亜父はこの時既に高齢で、しばしば、病で倒れては、翌日には何事もなかったかのように畑に戻るということを繰り返していたのだ。今回もその類かも知れない。だとしたら、時間の無駄でしかない。ならば……、

——というわけにはいかないな。

と、フウルウは一瞬迷ったものの、すぐにミナレットに戻ることを決した。ディーナザードがわざわざ手紙を送ってきたことに意味を見出したのだ。この頃、二人の仲は陰悪といつでも差し支えないものだったが、それ以上に互いの判断は信用していた。

そして、ミナレットに帰ると——そこには両手両足を包帯で拘束された亜父の姿があった。

それは娘であるディーナザードの献身故の姿だった。彼女の説明によれば、以前から問題になっていた消化器系の癌細胞がとうとう全身に転移し始めたのだという。もう、自力で食事することは出来ないし、仮に口にモノを含めても、咀嚼できるかどうかとも怪しい。そもそも、胃から腸まで、満遍なく癌でズタズタなので、消化できる見込みは皆無だ（最悪、腸の途中で腐り出すだろう）。勿論、そんな状態なのだから、亜父の脳には常に耐え難い激痛が走っている。そのため、既に半ば発狂しており、暴れ回って、事故死する可能性も高い。実際、一度は危なかったそうだ。加えて、四肢がもう腐りかけており、まともに

動かないので、寝返りを打った拍子に心臓や肺を圧迫する姿勢になり、そのまま身動きがとれずに圧死する危険すらある。だから、拘束しているのだと。包帯でぐるぐる巻きなのは、少しでも腐敗を遅らせるためであり、また、新たな引っかけ傷を作らせないためだ。今の亜父の皮膚は爪で軽く引っかいただけで、削げ落ちそうなほどに脆弱になっており、しかも、どんなに小さな傷であっても、それを再生させる能力が最早残っていないのだ。思い切って、フウルウは尋ねた。——一度は危なかったという事故死未遂……本当にそれは事故だったのか？ あまりの苦しみに耐えられなくなった亜父が、一瞬だけ正気を取り戻せたので、最後の力で自殺しようとしたのではないだろうか？

すると、ディーナザードは答えた。——……わからない。それはあたしも考えたけどね。わからなかった。ただ、もうあたしたちにそれを確かめる術はない。……あの時、あたしは何も考えずに手を伸ばしていた。あるいはあたしは、不孝な娘だわ。父親の苦しみを増やすようなマネをして。

そして、彼女は『傍に居てあげて』と付け加えた。フウルウはディーナザードの言葉に従った。

だが、することがなかった。できることがなかった。

とりあえず、手を握った。包帯の感触しかなかった。消毒のためだろう。体中から酒精の匂いが漂っていた。当然だ。そもそも、手足の壊死を防ぐために、包帯をし、消毒をしているのだ。

どうするべきかまるでわからなかった。

ただ、戸惑いと悲しみと涙だけが止まらなかった。

……見舞いに来た村人の一人は亜父を見た瞬間、涙を流して、ディーナザードを鬼娘イフリタと罵った。

両手両足を縛られ、身動きの取れない亜父の姿は『見ていられない』ものだったのである。亜父はフウルウの人生の倍以上もの長さを畑仕事に費やしてきた。だから、かつて、亜父の手足は、老年ながらも、青年のフウルウのそれよりもはるかに太く逞しかった。ところがその手足は拘束され続けた結果、枯れ木のようになっていたのだ。しかも、どうしてこんなことになったのかと、尋ねかけても、最早、亜父にはうわごとを返すことしか出来ないのだ。

亜父は村人たちからも人望が厚かった。だから、そんな状態にしたディーナザードに、憤った村人がいたのも無理はない。

勿論、医師としての素養もあるフウルウには、その処置が必要であることが瞭然としていた。そして、その処置がこれ以上もないほどに適切であることも理解できてしまった。仮にあの時、鶴がいて、フウルウに用いた『傀儡の術』を施しても、結果は同じだったろう。それ位、圧倒的な死に亜父は犯されていたのだ。そのどうにもならない現実を認めざるをえなかった。だから、フウルウには彼女へ憤ることが出来なかった。

ただ、鬼娘と罵られながらも、自嘲気味に冷笑し、それでいながら、死にゆく亜父に対し、出来ること、すべきことを、一つ一つこなしといったディーナザードに、自分はどうかすればいいのか——まるで見当が付かなかった。

……亜父の死ぬ間際の数ヶ月、フウルウは自分なりに尽くした……つもりだった。

身の回りの世話を申し出、特に排泄物などの汚物の処理を進んで行った。慣れない掃除や洗濯もこなし、生来の人間嫌いを押し殺して、見舞いに来る客をもてなした。そして、亜父が耕していた畑を――亜父に比べると大分下手糞だったが――背一杯手入れした。

手が空いた時には、鎮痛のために大麻カンシユを処方するディーナザードの隣で、最早一日のほとんども意識のない状態で過ごす亜父を黙って見守っていた。

フウルウには見守ることしか出来なかった。

出来た事といえば、手を握ったことぐらいだ。

ディーナザードに対してだけではない。亜父へどういう風に声をかければいいのかもわからなかった。

いや、そもそも、フウルウにはその時の亜父が亜父には思えなかったのだ。

郷里にいた頃から、自分は論と理を以って、他者と向き合ってきた。情愛のない奴だとしばしば言われていたが、恥じることはなかった。自分は禽獣ではなく哲人を相手にしているのだと言いつち、そして、言葉ロゴスを用いて語れぬものは人間ではなく、したがって、相手にする必要もないと断じていた。そのため、フウルウの周りにはその手の人間しか寄ってこなかった。亜父との関係を構築できたのも、彼が恩人であったという以上に、彼が在野に埋もれている、しかし、一個の賢人であったからだ。当然、亜父との語らいは――亜父がフウルウに合わせてくれたのだろう――その多くが討議と遊戯の形をとっていた。そして、その時に垣間見える輝く知性をフウルウは尊敬し、亜父と認識していたのだ。

だが、今の亜父には……。

ディーナザードは時々「あう。あう」と意味不明の言葉を繰り返すばかりになった亜父の口元にもきちちんと耳を向けていた。赤子をあやすようにではあったが、「うんうん。そうだね。春になったら、西瓜の種をまきましようね」と、ディーナザードは真剣に老人に接していた。フウルウのような頭でっかちではなく、他愛のない世間話にも花を咲かせられるディーナザードにはそれができた。

かつてない敗北感に襲われた。

周囲の者の中にはフウルウを褒めるものもいた。なるほど、恩人に立派に尽くしているようにも見えたかもしれない。しかし、ディーナザードはフウルウを相変わず軽蔑していた。多分、彼女にはわかっていただろう。所詮は、贖罪と内罰に過ぎないと。

そして、亜父は眠るように死んだ。

……涙は尽きていたらしい。別れの際、ディーナザードは、当時、太腿まであった己の髪をばつさりと首の辺りで切り落とし、亜父の棺桶に添えた。

しかし、フウルウには送る言葉がなかった。

あれから、ディーナザードの三つ編みは腰の辺りまで伸びた。

だが、未だにフウルウは……。

亜父の死後、一度、酒の勢いで、ディーナザードに教えを乞うたことがある。

私は……俺はあの時、どうすれば、よかったのだろうか？――と。

すると彼女は鼻で嗤った。

「そうやって、告解すれば、贖罪になるとでも？」

そして、心底苛立った口調で、ディーナザードは酷薄に吐き捨てた。

——あの人はあんたにただ一言『お父さん』と呼んで欲しかったんだ。あたしではなく、あんたに。何でそれがわからないの？

畢竟、フウルウはあの頃から何も変わっていないのだろう。

\*\*\*

結局、その夜は二人とも肝心なことは何も話せなかった。

『おや、この果汁水シヤルバツトはなかなか美味いな』そうですね。そういえばディーナザードさんが作ってくれた果汁水シヤルバツトには酒ハラムが混じってて……』……実のない話ばかり、普段とは正反対だった。

翌朝。

傀儡の体の調子の確認と街の見物、ついでに散歩と手紙の投函を兼ねて、フウルウは鶴がまだ眠っている朝早く一人で宿を出た。

——どんなくだらない話でも、鶴と話している時はそれなりに楽しかったのに……昨夜はとことんつまらなかったな。

投函を終えた後に、町中を流れる幅十クーデ（五メートル）ほどの深々と水を湛えた農業用水路に沿って、意味もなくぼんやりと歩いていた。

当然、これは迂闊な行為である。

しかし、鶴が襲われようとも、フウルウがいないことに気付いて心配しようとも、正直、どうでもよかった。一瞬、このまま、鶴を見捨ててしまおうかと夢想し、自分が鶴と離れて生きていけない体であることを思い出した。そもそも、その気になれば、フウルウと鶴は離れていても、互いの位置や状況の把握はおろか、ある程度の意思の疎通すらできる。離れることは決してできない。フウルウは鶴の傀儡なのだから。

「……出てきたら、どうです？ こちらは色々と話したいことがあるのです」

「……驚いたな。まさか、気取られているとはな……」

どこからともなく、ぞろぞろとラシードを始めとして警官たちが出てきた。

「既に《虎体狼腰フーディーランヤオ》は発現させていましたからね。これも傀儡の特権ですよ」

「……悪いが何を言っているのかはわからない」

「すいません。ちょっと自嘲したい気分だったので……」いっそのことこの男に相談に乗ってもらおうかと、フウルウは考えていた。「ですが、そうやって、姿を表すという態度をとっておきながら、影から弩で狙うというのは、怖いのでやめてもらえませんか？」

ラシードたちの顔色がさっと変わった。凶星だったのだろう。彼らの二段構えの作戦も傀儡の感知能力の前には無力というわけだ。

そして、用水を背後にして追い詰めるという布陣も、傀儡の超人的跳躍力の前には……、とも、思ったが、フウルウはここは少しでも情報を引きずり出そうと考えた。

「大したものです。一晩も経たない間に見つけられるとはね。まあ、街中であれだけの騒

ぎを起こしたのだから、遠くないうちに見つかるとは思っていましたが」

「市民の協力あってこそだ」

「いえ、協力を得るだけの過去を積み上げてきたあなた方の実力ですよ」

「ならば、大人しく、両手を頭の上に乗せ、地面に仰向けになれ」

「その前に幾つか質問に答えてくださいませんか？」

「刑務所の中でなら、聞いてやる」

ラシードの言葉には断固たるものがあつた。容赦なく棍を握り締めている。フウルウは彼に好感を抱いた。この期に及んで、なお、あの棍は非殺傷性のものだ。鶴は既に殺意のこもった一撃を仕掛けたというのに、ラシードたちは自分を殺そうとはしていない。それでいながら、任務は厳然と遂行する。実にいい警官だ。

「……あなたは《再生への導き手》ではありませんね？」

「《再生への導き手》？何を言っている？」ラシードは一瞬困惑しつつも、突如納得した容子で「いや、待て……なるほどなるほど、貴様らは《再生への導き手》の一味か。これで合点がいった」と言い出した。

「私が《再生への導き手》？まさか、私は彼女らと対立する立場にあるものですよ」

「ふん。偽言を……」

フウルウは状況が読めてきた。自分は事実を話しているのに、相手はわかってくれない。

どこかで、重大な齟齬があるようだ。

「もう一つお尋ねしますがあなたは警官ですね？」

「見れば、わかるだろう」と、ラシード。確かに彼らは制服を着用している。

「では、最後にお聞きしたいのですが……あなたは《アル||イクシルの手先》ですね？」

「また、妙なことを言い出したな。我々が賢者様——アル||イクシル殿をお守りするのは当然の話だ。恩義もあれば、義務もある。相手が貴様らの如き無法者とあれば、尚のこと」

「……ほう、そういうことですか」

フウルウは苦々しい気分になった。どうやら、完全に自分たちは悪役のようだ。

「ふっ」

薄く微笑みながら、フウルウは飛び上がった。

水が満ち溢れているその用水の向こう岸までは約十クーデ（約五メートル）。走り幅跳びの距離としては、まあ、体術に秀でもものならば無理ではないかもしれないといった距離だろう。しかし、立ち幅跳びの距離としてはその困難は言うまでもないし、それが後ろ向きのままということではなおのことだ。

だから、ラシードたちは自分たちが隙さえ見せなければ、フウルウが向こう岸に飛び降りることはないかと踏んでいたのだろう。その判断は正しい。フウルウが人間ならば……。

ラシードたちがこうやってフウルウを追い詰めたのは交渉を有利に進めるためだろう。逆にフウルウが話し合いを有利に進めるためにはこの場を脱して見せたほうがよい。

だから、あえてフウルウは約十クーデ（約五メートル）を後ろ向きのまま、立ち幅跳びで、しかも軽々と飛び越えることにした。人間には無理なこの距離も、傀儡という超人と化したフウルウならば……。

——あれ……？



思ったより飛距離が伸びない。

——あ、そういえば、今日はまだ鶴の調整を受けていなかったような気が……。

どぼーん。

「げほっ！ げほお！ だ、だれか助けて……」

こういう用水は見た目よりも流れが速い。また、フウルウの体も（探査系は正常に働いていたが）万全ではなく、服も着込んでいる。そのため、あっさり溺れてしまい……、あつという間にラシードたちは見えなくなった。

「……な、何なんだ……奴は？」

啞然としながらもラシードは、なるべくなら彼を助けるようにと部下に指示を出した。